

季刊誌「あたらしい道」

令和五年冬号

〔537号〕

(2023年)

一般財団法人 あたらしい道

季刊誌「あたらしい道」

令和五年冬号(2023年)

〔537号〕

令和五年冬号(2023年)

第537号

あたらしい道

【今あることを喜ぶ】

よろこび 喜ぶ よろこぼうえ
今あることを 喜ぶ
何でも 喜ぶ
そこに 妙がはたらく

(日めくり『やまとの言葉』より)

今あることを喜ぶ

松本草垣女史

語録煌々より

目次

—テーマ「今あることを喜ぶ」—

「ことのは」……「今あることを喜ぶ」……1

今あることを喜ぶ 喜びの理 喜びやになる 喜ぶ理 喜びを湧かす法 喜ぶな
いならやめちやえ いい事だけしか喜べないのでは片手落ち 人の喜びを吾が喜
びとする 人の喜びによって自分も喜ぶ 喜び合うということ 今を喜ぶ 喜ぶ
理 喜べば身につく 喜びの理

「ひながた」……『矛盾を超えて』より ……11

喜びに生きる 「小さき園」

「リバイバル座談会」……「酒はこれ喜び」……14

酒は育てるもの 麹菌に苦をさせる 誠がこもった酒造りの製法 米には「いきり」

がある 男の一理 造る人の家徳が味に顕れる 自然をおろがむ 米と日本人の融和
醗酵作用の神秘 喜びを売る商売 酒は天からのプレゼント

足跡 ・ ・ ・ 「父の思い出（上）」 ・ ・ ・ ・ ・ 福井 蓑輪一美 ・ ・ 29

―いろいろ端で聞いた古い教え― ウルシの話 夕食後いろいろ端のひとつとき 秀吉に
呼応し利家に反抗して切り抜けた先祖 泥棒の話 カイコの話 父のこと 母のこ
と 大事に育てられる 勉強したら馬鹿になる 仕事場にて 仲良くさせるのが自
分の仕事

寄稿 ・ 天人女史の教えから学ぶレジリエンス ・ 埼玉 市野道明 ・ 46

レジリエンス レジリエンスの正体 みたまの開花 みたまの神秘「全智全能」 日
本の危機 天人女史に学ぶレジリエンス おわりに

編集後記 (元の日本とは)

【みんなでつくろう、みんなの季刊誌】

(投稿) 原稿用紙一枚 (内容自由)

公募中

(表紙題字・松木草垣女史御親筆)

書・松下賀奈子さん



「ことのは」

【今あることを喜ぶ】

今あることを喜ぶ

「当たり前前の事を喜びなさい」ってことね、お分かりでございませうねとにかく「今ある事——こうしていられることを喜ぶんですよ」
って言うんです。

「今こうしていられる事が、なんと有難い事よ」とお喜びになったら、
「ああ、そうだ／＼いいことを思っちよるな」って、自分のここ（みたま）が喜んでくれますからね。

そうすると、何時かまあ、それに倍も／＼加えて下さる事、これ請け合い
なんでございます。それが初めなんでございます。

「何かいい事があったら喜ぼう」と、これがなか／＼、この道としては、
「ずるいぞ」「あの思いがずるいぞ」「あれではどう仕様もない、あれで
は何も、手のつけようがない」って言うことになるんですからね。

兎に角、今ある事を喜ぶんですね、分かりましたか。そうすると喜びが連
続しますからね。

“ ああ結構々々々々 ”

そうしたらね、どかん／＼とね、何か有難いふうに分をしてみたい。…

(「煌々」より)

喜びの理

こういう時代です 何となく／＼ 今ですよ

今こうしている これが有難い こう思うわな

それがな 分からないようでは あーあ とんでもない

お前さんら そのところを 思い起こして

喜び屋になろう これが肝心です

そのところを お前さんら 何かかにか

特別なこと 特別に喜ぶこと そういうことを期待する

それはな いずれ／＼ いずれ(のこと)やで

とにかく 道のお方

今を喜ぶ これが本当 難はない これなんです

無難やで だから 有難いんじゃないかな そう思おうわな

(昭和三十三年三月三日ご垂示より)

喜びやになる

「喜ぶ」ということについて

ちよつとしたことでも「ああよかった／＼」「これでよかったんだ」っていうふうには、簡単な（何でもないちよつとした）事を喜ぶんですね。

これを毎日自分に言い聞かせて、けいこするんですね。それをなさらないと、そう急には「喜ぶ」ということは湧いてきませんね。

子供だましみたいなきことですけれども、ご自分でクツ／＼笑いながら、当たり前のことを喜ぶんです。

なにか特別なことが有ったら、有難いんだ／＼と言って喜ぶのとは違いますよ。それはまた別なんです。普通にこうしていられることを喜ぶんですよ。

「なーんだ、そんなこと当たり前じゃないか」ってね、でもその当たり前が、いつ何時、どういうことになるか分からないでしょう。要するに、「生きて行ける——これが大したものだ」ってことを知って下さい。

で、道の方は若い者のために長く生きて生きて、次の世代のたしにするようにしなけりや駄目なんです。

とにかく「喜び屋」になるっていうことを建前として下さいね。朝目が

覚めたら「ああ、いいなあ、今日は結構だなあ」って言って、まず、それを仰るんですよ。そして行動に移すんですよ。

(「煌々」より)

喜ぶ理

皆は、とこ／＼／＼／＼と探しおる、何か喜ぶことないかと探しおる。

足許じゃ／＼。足許見そこなつとる。：

我の足許から喜ぶ理が湧いて出るぞな。：

ほうら、それ／＼／＼右と左の足をいな、若しとられてしもうたら、どないも、どもならんに違いない。足がある／＼。その足許皆ひよつとお忘れやでな。喜ぶ理は足許にな。

(「天の理」より)

喜びを湧かす法

あなたにね、喜びを湧かす法を一寸申してあげます。

あなたね、人さんのいい所をさがすんでございますよ。よろしいか。

“あの方にああいう自分がない所があるなあ”

それをおさがしなさいませ、よろしいか。

そうしたら嬉しくて／＼たまんなくなりますよ。

人のいい所さがしなさい。

(昭和四十三年八月三日ご垂示より)

喜べないなら やめちやえ

：喜ぶんなら またお戻りや

喜べないのなら やめちやえ

さーまあ——これが本当です。

(昭和四十七年一月十四日ご垂示より)

いい事だけしか喜べないのは片手落ち

皆さんね、いい事でしたらお喜びになるでしょうけど、何かね、しにくい事でもね、"これを通して下さるんだなあ"と、こうお思いになるんですね。そうしてね、

"それによって、自分が燃えられるんだなあ"と、こうお思いになった

ら、それ(しにくい事)が、やっぱり喜べるはずでございませよって、ね。

"やらせて下さるんだ、やらせて下さったんだ"と、こう思うんですね。どうもね、いい事ばかり喜ぶけど、でなかつたら喜べないということではね、まあ、片手落ちでございませわね。

(昭和四十八年十月二十五日ご垂示より)

人の喜びを吾が喜びとする

今貴方が仰った “人の喜び（嬉しいこと）を、自分がまた一緒に喜んでお上げする、喜びして貰う…”

何時でも、今自分のこうしていることを喜ぶというのは、これはね、この道の、当たり前のことです。

で、それはそれとして、人さんの喜んでいる時にね、

“ああ、あの方、良かったなあ” って、また共に喜ぶんですね。

そうすると、それは、“情” と言います。…

“あの方、あんなに喜んでいらっしやる。よかったなあ”

って、自分も共に喜ぶ、これ “情” なんです。その種別、チェーンとしときなさいね。…

（昭和四十八年七月二十四日ご垂示より）

人の喜びによつて自分も喜ぶ

もう今日この頃はね、お互いが喜び合うんです。

そうすると、人さんにね、いいことを仰って、

“いやあー、いいこと聞かして貰いました”

って言って喜ばれたって、先刻誰方が仰いましたわね。そうすると、その

人さんの喜びを、また自分が受けて、また喜ぶんですからね、喜びが倍加しますね。でね、「喜びに喜ぶ」っていうことを言うでしょう。

それは、人の喜びによって、また自分喜ぶんですね。この道は、そういうところなんでございませうからね。

(昭和四十八年八月十六日ご垂示より)

喜び合うということ

「喜び合う」っていうことをね、どうぞ皆さん、気にしましょうね。喜び合うんですよ。

つまり、人さんの喜びを聞かせて頂いて、そして、それをまた、「よかった／＼」って言ってね、喜ぶんですよ。

それが、喜び合うということになるんじゃないやありませんか。

：いい事、いい話だけをね、「こんなことがあった、あんなことがあった。ああよかった／＼」ってね、お互いに喜び合いますね。それが、喜びに喜びを、また増すって、こういうんです。

でもね、ご自分の身体が、多少はどうこうする時(具合が悪くなる時)もあるでしょうけれどもね、そのように成ってきた事によってですね。また「よかった」って喜ぶんですね。

ですからね、よろしいか、気楽トンボでね、臥せって喜ぶというのと、喜びが違いますよ。

皆さん、これからは、いろんな時がありますよ。でもね、それは受け取りようで、いくらでも喜べるんじゃないやありませんか。

喜ばなかったら損しますよ。

これをどうぞ一つ、聞いて下さい。

今を喜ぶ

(「煌々」より)

“これだ／＼、これを喜ぶんだ。これが自分をおためし戴いているんだ”
“とこう思えたら、何ともいえないお徳なんです。

ためされている、おためし下さっている。有難いじゃありませんか。

おためしは、自分のへそ(みたま)からためされるんです。

これ喜ばねばと何とか(理屈を)こねないで、即座に”これでこそ…”と
思えるようにならないと、何にもならない。

気がわく／＼沸いてこそ、どんな場合にでも生きて／＼生き了らうでって、
これでございます。

どうぞ一つ、皆さん、宜しいか、相共にですよ、生き了らうでって、

ね。それでね。みたまさんに反する気持ちだね、ヒョコツと湧かす場合が無きにしても非ずです。

その時は、すぐハツと気が付いたらね、
“ご免なさい！”っておっしゃるのよ。

明日の事、心配していらしたら駄目ですよ。

(おわびとお礼で)今晚をチャンとしとけば、明日はいい風が吹くんです。今を完全に思い切るんです。それで、明日は自然に、またチャーソンと成ってきますのよ。それが不思議なんでございます。

(「煌々」より)

喜ぶ理

喜ぶ気になると、その氣に天が乗るんじゃない。天気じゃ、天きじゃ。

(「天の理」より)

喜べば身につく

この道は やれ／＼ 喜びに喜ぶ

それが／＼ そも／＼です

喜ばないと 身につかんのえ さあ 分かった

喜びましようえ 身につくんですよ

喜びにおいて 身につくわな これに分かったらしい
喜ばないと 何もならない

(昭和四十九年一月二十九日ご垂示より)

喜びの理

∴人のことを喜ぶことが肝腎じゃ。
人のことじゃ。人のことはひとごと非ず、我のことじゃ。∴
人の寄り合いだから人のことで喜ぶようになるんじゃ。
我悲しい、我つらいが、人のことで喜ぶのが本当の順序じゃ。

(「天の理」より)

ひながた

【「矛盾を超えて」より】

喜びに生きる

：母上様。人は肉体が丈夫だと思ふ事が（自信となって）幸いです。人はその反対ですから、肉体を計算にしています。日々たよりない生活です。只よろこびで生きています。よろこぶまことに天が生かしてくれています。

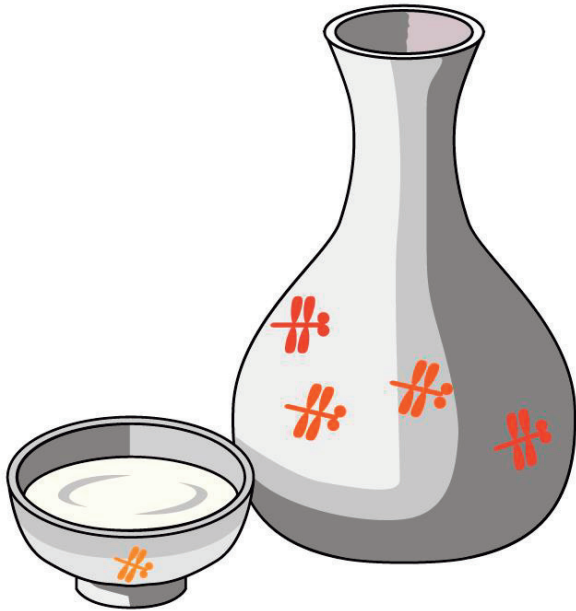
（第五篇 羽曳野時代（一） 天の手紙（一））

「小さき園」

——女史は幼稚園時代を回想して——

…（幼稚園の）お母さん達は私の一番の苦手だった。それでもいたし方ない仕事だった。経営は大変で、保母さんの手当を渡すのが精一杯で、私に酬われるものはなかった。でも私は誠が有難かった。子供を通していろいろ知った。子供は神さんと思った。

（第一篇 幼稚園時代）



酒はこれ喜び

—酒造りで思うこと—

出席者

島田惣太郎

(建築設計)

坪井安三

(商業)

間 三吉

(酒造業)

今田周作

(酒類卸業)

伊藤博志

(農業)

石井正晃

(米穀販売)

司会

伊藤文雄

*酒は育てるもの

司会 間 (はざま) さんも実際に醸造の仕事に携

わっておられますが、お酒を造る過程で何か、お感じになることは？

間 酒は造るんじゃないに育てるんですね。米を洗って蒸して、それからまず麴を造るでしょう。この麴は、造るんでなしに、まさに「子を育てる」という感じですね。特に私どもでは、手造りですので、本当に一粒々々の米粒を完全な麴になるように手入れをいたします。

この麴を基にして酒母(モト)を造るのですが、これもまた室温から品温を見ながら、ゆっくり膨らんでくるのをじつと見ながら育てるわけです。

ここで酵母菌が純粹に多量培養されていくわけです。約二週間かかって酒母が出来上がる(昔は約一ヶ月)。それから、大タンクに入れて本仕込みが始まります。これが約三〜四週間、酒作りは併行復醗酵と申しまして、米の澱粉質を糖化しつつ、

アルコール醗酵させていくわけですので、非常にデリケートな過程を通ります。

昨今は機械造りもありますが、それでも、ポイントは杜氏の腕の見せどころですね。だから、私も蔵では杜氏初め、蔵人に「真心を仕込んでくれ」と申ししております。

酒造りの親方を杜氏と申しますが、酒造りの期間中は全神経を使い果たしておりますね。

* 麹菌に苦をさせる

島田 私の親戚に杜氏がおるんですが、その人に聞いたらね、麹菌を、そうして、酒母を造るときに、「苦をさせる」というんですね。

それで、麹菌を置いた場合に、バーツと表面に繁殖する。それを湿度と温度を管理する。真剣にねーそれなんです。その苦のさせ方によって、

いい酒と悪い酒ということになるらしいですね。

その「苦をさせる」というのはどういうことかというとな、麹菌が繁殖して、その根がずっと満遍なく米の中身に入っていくようにすることなどで、丁度いい頃になるのが難しいらしいですね、外から見えてね。その辺はやっぱ優秀な杜氏でないとは分かんらしいですね。その苦をさせずに放って置いたら、バーツと温度が上がって、アルコール醗酵と言いますか、酸っぱくなっちゃうんですよ。それを上がらないように冷やすわけですね。そして、醗酵し過ぎるやつを醗酵させないよ、うに適温を保っていくことを「苦をさせる」と、こう言うんですね。

間 ほつといたら、ドーンと伸びちゃう。

島田 それだから、やっぱ逆らうものがあるんですね。苦をするからいいものができる。磨かれ

るといふ、人間の育て方と一緒にだと、そんなような気がしますね。

*誠がこもった酒造りの製法

伊藤 それと、仕込みによつてね、また違つてくるんですね。

間 そりゃ仕込みによつて違います。おやかたさまが我々に仕込まれるのと一緒でしょうね。

今田 香りのいい吟醸酒、最上の酒とされている。こういうお酒はね、それを造る杜氏は酎（もと）を仕込む最も大事な時には約一週間夜寝る間も惜しんで、一時間ごとに麴の具合、酒母の醗酵の状態を、まあ目を引つ込ませてね、我が子を育てるように手を入れていますね。「酒は生きている」という証拠ですね。本当に精魂込めると言いますか――。

坪井 杜氏の苦しみというのは冷たい冬なんですよ。寒風の時季にほとんど裸で雑菌を入れないように禪一つでやる。今はどうか知りませんが。

間 今はね、機械を使つてやりますからね。室温とか湿度を調節する機械がありますよ。あるけどね、やっぱりこの天然の温湿にはかなわんそうですよ。ですから、吟醸酒を造るのなんかは寒中にやりますね。機械があるからできるようなものの、そりゃあ、夏にはきかず、やはり寒中ですね。天然の力にはかなわない。

坪井 手塩にかけるというのはそういうことなんです。禪一つの裸になつて樽を洗っている姿を見たことがあるが、なにしろ、杜氏はよほど寒い北国の人でないとだめでしょうね、辛抱が出来ないから――。

間 それから吟醸酒なんです（吟醸酒とは原

価を考えずに最も贅沢に造る酒です)、先程の芯白の大きい粒の米を大体五十%搗(つ)き米洗でも、手で一粒々々ていねいに洗うことから始めて、麴酒母、本仕込み…と杜氏は寝ずに頑張りますね。

今田 お米は外側程たんぱく質が多く、中程、澱粉質が多いことはご承知の通りですが、あまり精白をせず仕込んだ酒は、アミノ酸が多くて雑味の多い、色も濃い、あまり香りのよくない酒になります。

だから、磨けば磨く程、雑味の少ない、柄のいい、香りのいいお酒が出来上がるんです。米の芯(五割以上磨き米粒が玉になる)で仕込んだ酒は、その他の条件を同じにした場合、最高の酒が醸造されます。

石井 お米を白く搗いて食べるというのは、日本人でも最近ですよ。

今田 電動式の性能のいい精米機が出来たのは最近ですから、昔の酒は色が濃く、味の豊富な酸の強いものであったと思います。それに酒造技術も設備も劣っていただけ製法に「誠」がこもっていたと思いますね。

清酒は世界のどこにもない、日本の風土に適合して育ったお酒です。醸造酒でアルコール度数の一番高いお酒は清酒です。ワイン・ビールは、ずっと低い。ワインでもよほど上質のものでない限り、砂糖を加えて醗酵させています。

* 米には「いきり」がある

間 やっぱり、なんですね、私思うんですが、世の中が地味になっていくに従ってね、日本人は米を食べて、それにつれて皆が日本酒を飲むようになる、とこう思うんですがね。大体、米が余っ

ているなんてことは、世の中、間違っている。なんぼ精魂込めて造っても、一方で、田圃を遊ばせておくなんて馬鹿なことないですよ。

それで、皆米喰って、そして、米で出来た酒を造らせてもろうて、酒の精を入れてもらえば、その精が男の精になって、男の精子で女の卵子と結合して立派な子供が出来てくる…。

伊藤 それすべて元を正せば、「天の気」を頂戴していることになるんですね。

島田 あのー、「米のいきり」と言うでしょう。あれがね、何か、こう、不思議な働きをしているように思うんです。そのいきりというものは結果でしようけどもね、それは精にあって、米の精を決してそこなわないように、ジュツと米から醸造して酒を造っていく。だから、そのいきりの中には、あの「息の理」ですね。そういう何か、胚か

ら精に連なって「天の気」に繋がるというーそういう音が並ぶような感じがしますね。だから、米の中へ手を入れたら、ぬくいきりがあるという。そういういきりです。そのいきりに大変、不思議な力があると思うんです。

で、灘の生一本という「生」というのは、どういうことになるんでしょうなあー。

間 あれはね、混ぜものをせず、できたお酒という意味です。大体、酒というものは米のみで発酵させた場合は、アルコール分十七・八度までだと思えます。それをそのまま、他のものと混ぜるに出して初めて「生一本」と言えるでしょうね。

昨今の造りは、そういうものもポツ／＼出てはおりますが、大体、アルコールを添加しておりますから、出来た原酒は二十度から二十一度あると思えます。それを普通規格の度数に調整して出荷い

たします。したがって、大体、普通に市販されておるものは、生一本とは言えません。

*男の一理

坪井 いきりがあたらしい道でいう「男の一理」というんじゃないでしょうか。

それは天の気から来るもので、精液という天の申し送りを具えている不思議な、種の働きによって親子の因縁が連鎖しているんです。ですから、「この道は米です。あたらしい道、これでもって世が切り替わるんえ」というお言葉がなつて来ると思っています。米の精と国の精は、酒の精によって燃える男の一理の中に難しく言えば、具象化される…。

問 日本酒の精のせいですか。ウイスキーやビールを飲んでいる人の顔とは、つやが違うんです

よ。

この頃、洋酒のオンザロックが流行つてね、水割り一杯飲むでしょう。顔はざらざらですわ。日本酒ばかり飲んだらね、つやく／＼してくるんだな…。

*造る人の家徳が味に顕れる

今田 それから、先程、清酒の製法で話が出ましたけれど、科学的に見ますと、清酒にはまず水ですよね。そこから湧いて来る水の良し悪しが影響する。それから、米ですよね。米の質による。それから、その土地の気候風土が、大変酒に影響する。それから、醸造設備で、この四つの条件を如何にこなす技術を持っているかという、この五つが大体、表に現れている点での酒造りの良否を決める要素だと思います。ところが、私は長

い間この商売をしていましてね。色々なお感元との取引を致しましたが、ただこの要素だけでは割り切れない何かがあるんですね。

この道に繋がらせて戴いて、近頃、ようやく、何となくわからせて戴いておりますが、結果として、それは、やはり、そこのご主人の裏側の面がどうしても出て来るんですね。と申しますのは、これはその家の持つ徳と言いますか、それが大きな伝統となつて、技術を超えた一つの風格を創り出しているわけですね。それが酒に現れて来ているんですね。恐ろしいことですね。

島田 やはり、人間の味ですかね。

今田 その方の歩んできた、積んできた徳が、形となつて法として現れてくるんですね。

坪井 米作りもやはり、作る人の思いがよほど大きく影響するんですね。

島田 それが不思議ですね。自然はごまかせませんからね。人間の作るものは全部、その人の因縁が出るんですね。米でもそうですよ。作る人の思いなり徳なり、味と言いますか、そういうものにじみ出ているんでしょうな。

坪井 ところが、米でも酒でも段々機械化生産されて、人間との距離が出て来た、そうすると生産物に対する人間の思いも薄くなつてくる。一方消費する側も、全体に西洋化した生活様式になつて来て米離れ酒離れが出て来る。この辺のところ、今の世の乱れのどうしようもない原因の一つになつてきているんじゃないでしょうか。

島田 建築でもそうですよ。設計者あるいは施工者、施主と、この三者の人間の触れ合いによつて、いい建物が出来るかどうかに変大きな影響があるんですね。特に設計者の人間的持ち味が出るんで

すね。最後は、技術を超えて出て来ます。そこにその人間の芸術性というものがあるんだと思います。

ですから、そういう面から言っても、人間が作り出す米にしろ酒にしろですよ、人間の統合された品とか徳とか、その人の持ち味がそこに出来るんですな。

それでやっぱり、日本の米は日本人が作ったものですか——つまり、日本人は根が深いとか、あるいは自然を拜んで精魂を打ち込む民族であったとか、情がこまやかであったとか——そういう日本人作ったものだから、やっぱりいいものが生まれてくるんだということは考えられますね。恵まれた気候風土とは別にね。

* 自然をおろがむ

石井 昨年は米が不作だったでしょう。しかし、いま島田さんがおっしゃった「自然を拜む」ということについて、素晴らしい体験をされた典型的な例があるんです。

それは、宮城県の畑谷さんという、道友の従業員の方なんですがね。その人は毎日朝晩、自分の田圃の畔を廻られたというんです。「ああ今日も少し大きくなったな」という、そういう思いを込めてですね。そうすると、昨年の不作の時にでも、ご自分のところには普通にお米が出来た、というんですね。

すぐ隣の田圃はやはり不作だった。それ程、極端に違いが見せられたというんですね。だから、自然を拜む（愛情も持つ）思いというのがいかに大切なことか、ということですね。その思いを自然が受取って、それで作物が良く出来る、すくす

く育っていくということですね。矛盾を超えるわけです。

伊藤 ああ、そのことね、それ、私の体験を伊藤誠治さんが畑谷さんにしたんだそうですね。それでね、宮城県で座談会をした際に、畑谷さんの嫁さんの実家の人がある座談会の席におられて、私の体験した話を聞いておられたんだそうですね。

ところが、最初は「そんな馬鹿なことがあるか」と言って受付けられなかったそうですが、二度目の座談会に来られたときから思いを変えられて、ご自分も実行されたんだそうですね。そうしたらね、見事にその結果が表れてね、周辺の田圃では全く収穫できなかったところもあったらしいんですが、ご自分のところは八俵も取れたと言っていましたね。それで喜んじゃってね、畑谷さんには米を持ってくるわね…もう大変な喜びようだった

そうですね。(笑)

今田 私の亡くなった父親が、生前よく申しておりましたがね。例えば、商売上色んなトラックを買い換えます。ところが、同じメーカーの同じ車種の車を買ってもね、車によっては大変、故障のよく起きる車と、そうでない車とがあるんですね。で、父はよくこう云いました。故障の多い車は。それを造った工員が夫婦喧嘩をしたんだ——。だから、こういうことになるんだとね——まあ、いわば因縁と言いますか、それをよく口ずさんでましたね。ですから何事によらず、その一日の仕事がうまく行くか、行かないかはね、お前の家にあるの夫婦喧嘩の在り方にかかっているんだという話を、よく話してくれました。これは明治生まれの人の一つの思想であつたんでしょうね。

確かにそういうことがあると、思えるようになる

りました。

*米と日本人の融和

坪井 米離れという言葉が出だしたのは、昭和四十二年なんですが、この四十二年には過剰米が出始めたんですね。で、この米離れし始めた頃から社会の風潮がうんと悪く成つて来るんです。

間 その頃ですよ。ビールやウイスキーがどん／＼出始めたのは、酒に代わってねー。

坪井 そうするとね、この分だと将来、米は取れなくなるぞと思つたんです。昨年九月、武蔵野公会堂で「米の理」座談会をやる準備をしている最中のことですね。要するに、米に対する愛情と何か関心が国民の間に薄くなつてきた、米を蹴飛ばしていることになる訳です。

だから、飲み物も洋酒が伸びて日本酒を飲まな

くなるわけです。そうすると、昨年度は案に違わず例外で大凶作でした。米の大減作を心配している国民は、あたらしい道以外、現在のところ日本国中探し回つてもごく少ないんじゃないですか。

伊藤 日本人の元々の細胞は日本人ならではの細胞だと思ふんですよ。その日本人の肉体の細胞には、お米が一番合つておる。こういう風に造られていふと思ふんですね。ところが、戦後、特にここ十数年来、米離れの風潮が全般的に広がつて、子供たちがパンをたくさん食べるようになって、パン食が変わつてくるでしょう。そうすると、細胞の変化を起しているのね。そうでしょう。それによつて西洋型の背の高いのが出来たり、すぐけがをしたりね、それ全部細胞の変化によるものだと思ふのね。

それと思ふ一つね、例えばビールとかウイスキ

ーとかばかり飲んでしていると自分に甘くなるのね。
お酒は元々、自分に厳しい、そういうものが備わ
つておると思うんです。日本人の民族性に合っ
てるんですよ。そういうね、細胞の変化による
性格形成といった点でも非常に大事なものがあ
るんじゃないかと思うんです。

そこへ行くと、あたらしい道の場の食卓は一汁
一菜でしょう。これは日本の元々の姿と思うん
です。

石井 そうですね。おやかたさまは、丁度、去年
の十二月でしたかね、おかずは少なくてご飯は沢
山召し上がるんですよ、とおっしゃいましたが、
いま、伊藤さん言われたようにお米を戴くこと
よって、とにかく、日本人の体質を日本人らしく
持続し価値つけていくわけですね。

伊藤 だから、今の子どもにしても弱いのが腰な

んです。日本人というのは腰が強いんだそうです。
島田 だから昔から、日本人は脚が短くて胴が長
い。腰が低くて丈夫なら肚も据わるといふ体型に
なるんですよ。

今田 胴が長いということは腸が長いんですね。
自然なんですね。農耕民族として米を初め、農産
物を主に食べて来た。長い間、そういう生活を続
けて来た訳で、それを急激に食生活を変えたんで
すから、当然、日本人としては、アンバランスに
成りますね。

* 醗酵作用の神秘

島田 醸造するのに醗酵作用がありますね。あの
醗酵があるからいい醗酵をさせるから、いい酒が
出来るわけですが、人間の体内にもその醗酵作用
がある訳ですよ。つまり、げっぷが出たりするで

しよう。日本人は腸が長いから、その腸の中で食べたものが醗酵するわけですよ。醗酵するということは低い次元から、も一つ上の次元に上昇するという意味を持っているわけですね。

まあ、米は酒になって、お神酒という、神さんに捧げるという、何か上に向かって醗酵しようとするものが、日本人には何か先天的にね、そういうものが植え込まれているように思うんです。

しかも、それがうまく最高の醗酵をするようにね、人間もそう造られている、米もそう造られている、そんなふうに、醗酵がね、思えるんですね。

神祕の理がそこにはあるような気がするんですよ。腸が長いということもね、何か分からないけれど、いい醗酵をするようにね、米を食べてそれが長い腸によって醗酵がうまく出来るようになってきているんだって、そんな気がするんです。

坪井 醗酵には繊細さが重要な働きをしているんだそうです。醗酵は醗酵で「気」の問題ですが、醗酵した後には毒素を持った廃棄物が残る、この排泄に米の繊細さが必要なのです。

米食人種の長い腸が粉食肉食に偏すると、腸内で醗酵できなくて腐敗しちゃうんですね。それを腸壁から吸収するからガンが増える。

現在、女の人の子宮ガンは二十万人に四人の割合ですが、今後十年もしないうちに、二百人になるって言っているんです。大阪栄養短大の河野友美教授が。

島田 腐敗して毒素が出るんでしょう。そういう毒素がね、やっぱり「気」になって空気の中へ出ていく。それから、さつき伊藤さんが言われた細胞が変化するというのは、細胞の中にそういう毒素が混じるから、ガンが発生するのか、それは知

りませんがけれどね、そういう何かの良くない変化を来すことは事実でしょう。ですから、日本人の体質に対して、天からばらまかれたと言われる日本の米が一番適しているんですね。

坪井 飲み物も醗酵した酒がいいんであって、蒸留酒は日本人には本当は向かないんじゃないかな。

* 喜びを売る商売

今田 それからもう一つね、少し話は変わりますが、酒販店の経営者から経営の方針について、大変、悩んでいらっしゃる方があって、質問されたことがあります。

「どういう経営方針を取ったらいいか」

という極めて素朴な質問なんです。私は突然のことだったので、思わず、

「喜びを売る商売、喜び屋さんになったら如何で

すか」

と、言ってしまった、自分としては随分、奇想天外なことを話してしまったなあと思いました。でも、成程と思い直し、

「喜び屋というのは喜びを売る商売。酒はこれ喜びだ。要はやっぱり、買いに来て下さるお客さんに、本当に喜んで買って戴ける——そういうお酒屋さんを目指していかれたらどうですか。それには色んな手がある。但しお客さんに如何に喜んで買って帰って戴くか、お客さんの身になって一生懸命努力してみして下さい。必ず、お客さんが、お店を担いでくれますよ。そのお店を維持するための適正なマージンは当然、戴けますよ」

というようなことを話させて戴いたんですがね、やっぱり、思いというもの、何事によらず清酒の造り方にしても、売り方にしても、飲み方にして

も、「基本は喜びだなあ」ということを感じますね。

* 酒は天からのプレゼント

坪井 あの、お酒好きな道友の柏木公文さんが、こんなことを教えて下さったんですがね。「酒は神が人間に与えた最大のプレゼントだ」って。酒によつて陽気になつて、ホカ／＼してくる、何とも言えん、自然と自分が融合するというか、とにかく、最高のエクスタシー、喜びがあるというんですね。それから、これは後でカットしてもらいたいんですが、「セックスは神が与えた最高のヒントだ」というんです。セックスなんていうのは小さい接触なんで、それはヒントに過ぎない。本当は天なる無限のものと有限なる人間との融合の中にこそ、真の親しみというか、悦楽というか、歓喜というかがあるんであつて、男女の交わりあたり

は、ほんのヒントに過ぎない、というんですね。

(笑)

伊藤 「酒は飲むんじゃない、たしなむんだ」と言われますが、たしなんでこそ天からのプレゼントということになるんでしょうね。

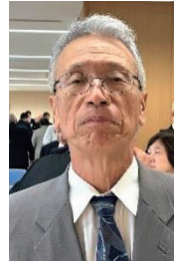
司会 どうも有難うございました。色々なお話を戴きました。まだまだ、話は尽きないようですが、今日は、この辺で終わらせて戴きたいと思ひます。

(終)

(昭和五十六年)



足跡



父の思い出（上）

—いろいろ端で聞いた古い教え—

福井 蓑輪一美

—【ウルシの販売量日本一・父から語り継がれた「先祖の教え」】

ご本人は一言もおっしゃいませんが、実は、蓑輪家は代々四百年にわたって、ウルシを扱って来られた旧家です。現在、代表をされている（株）箕輪漆行（銀行は金銀を行います）が漆を行いますは、ウルシの販売量では日本一です。

また、近くには、有名な縄文遺跡「鳥浜貝塚」があり、ウルシの起源は古く、縄文時代にさかの

ぼる訳ですが、そのウルシの製法は今と変わりません。縄文時代にはウルシの製法はほぼ完成していたと言えます。そして、蓑輪さんの先祖は、おそらく、縄文時代からずっと漆に関わっていた一族だったと考えられます。

長男として生まれた蓑輪さんは、小さいときから「跡継ぎ」として育てられ、一家をまとめることを任されました。

毎晩、蓑輪家では、夕食が終わるといろいろを囲んで、おじいさん、おばあさん、お父さんたちが、寝るまで話をしてくれました。代々続く、古い蓑輪家の歴史の中でも、先祖さんたちが残した大事な教えを口伝えで聞きながら育ってきました。その様子を伝える場面も多く語られます。

それは、もしかすると、古いこの道が口伝えされてきたのと似ていて、こんな風だったかも知れ

ないと、想像させます。

「この道の理、遠い昔神代の頃に、人間というものはこうありえ、こうあるうえ、そういうふうにごとごとに教えてある」『煌々』とおっしゃっています。

またそれは、縄文時代の生活の原風景とも重なります。父さんが狩猟や魚取りに行ったあと、お母さんは家事をしている。その間に、大抵は、家に残っていたおじいさんが孫の面倒をみます。いろいろで先祖のことや色々な事を教える様子は、蓑輪家のそれと同じだったのではないのでしょうか。お父さんは、ちよつとの事ではビクともしません。何百年もの間、生きて来た先祖さんたちから受け継いだものがあるからでしょう。今回、様々なエピソードを交えて語って下さいます――。

ウルシの話

蓑輪 ウルシは、縄文時代、約一万二千年以上前からね、使っていました。ウルシの木を傷つけて漆を採取するというやり方で、今も縄文時代も一緒です。全部手作業で、縄文時代も石の尖ったのでね、傷つけて、傷ついたところから、樹液が出るわけで、ウルシの採取手段は、今は金属があるけど、刃物で切るか石で切るかの違いだけで同じように採取していました。

福井県の鳥浜貝塚から赤いウルシが出ましたけど、その赤色を出すその顔料を混ぜるなどして、漆を採取したり生成するとかいうことはあるけど、大体縄文時代に八割位はもう製法が仕上がっていったらしい。だから、今の人が考えたわけでないに縄文時代、大体もう、五千年以上一万二千年前にそれが出来上がっていたということですね。一

二割は、今の人が研究して、塗る技術とかをあとから開発してますけどね。

また、嘘か本当か知らんけど、縄文人から聞いたわけじゃないから分らないけれども、ウルシは、ハチが探してきたんでねえかという話もある。

ウルシは縄文土器でもそうだけど、接着剤になるから、ハチもこれで巢作りしたのかも知れない、そういうことも聞いてますけどね。それにしても、人間は何故あのウルシの製法が分かったのかは不思議です。これはやはり古人が、みたまさんから知らされたことだと私は思っています。

だから、ウルシは、昔から色々なものに使ったりしたけど、一番大事なのは、薬として使った面があるんです。病気のとき薬として、ウルシを使っていたという。今でも中国とか韓国では漢方薬として使っていますね。かぶれるという、アクが

あるからね、そういうような働きが。薬か、接着剤か、漆器として見て楽しむか、色々な要素があるんですね。それが縄文時代から使われていたということなんです。

夕食後いろり端のひととき

菱輪 「古い家だから、お父さんから色んなことを聞いたやろ」と言われますが、その通り。色々の話を聞いて育ちました。何人、子供があっても、家督を相続する人には、大事な人だから、代々仕込むのですね。親が、子供を仕込む。だから、うちの父親もね、長男でなく、男四人兄弟の次男坊やっただけども、親が見込んで、両親がこの家を継ぐのは、うちの父がいいだろうということで、親父を家の家長としてね、仕込んだんです。

どうやって仕込むかっていうと、だいたい、昔の家は真ん中には囲炉裏があったよね。そこで火

を焚きながら、夕食が済むとみんな例えば、父親の前でじいちゃん、ばあちゃんとかが、そこで色々な話をするわけなんよ。

昔の歴史を話したり、村のことを話したり、世間のことを話したり、色々なものの知恵をつけるわけなんや。だから商売は、こうしたらええぞうとか、商売は薄利多売やとか、色んなことを、一晩や二晩ではなくて、毎日毎日や。夕食が済んだら、六時半位からずっと寝るまで十時でも十一時でも。毎日そんな風だから、聞いてて退屈しないように、面白い話をしたんだね。面白い話をしながら興味を引きながら、その中で為になる話をするんですよ。

よく夜遅うなるから、近所の皆さんが、明かりがついているのを見ていて、毎晩、そんなに話すことがあるんですかって、よく言うよった。

親父もそうやったし、私も家督を継ぐということになると、毎日そういうようなことだね。親父を仕込んだように、今度は私を仕込むわけや。私の父親から嫁と、じいちゃん、ばあちゃんが色々な話をする。

秀吉に呼応し利家に反抗して切り抜けた先祖

蓑輪 昔、蓑輪家は、何百年前はな、どうだったとか、こうだったとかね、織田信長の時代はこうやって、信長の頃はこの辺は朝倉義景の所領ですから、そのときには、朝倉の家臣やったけども、信長に頼まれて、木下藤吉郎が先頭に立ってやって来て、工作をしたとか、買収やの。昔はお金でなく米や。米を何十石やるから信長の味方についてくれんかとか、そういう書付けもあるんやけども、結局、信長についたんや。うちだけでなくて有力な家臣を粘って、秀吉はそういう、調略が上

手なんや。調略して何人も信長に味方させて、朝倉義景は、すぐ落ちてしまったんや。

だから、そうしないと力の強いもんと士が戦うと、信長も犠牲が大きくなるから、そのために、簡単に落ちるようにね、調略や。そういうところで見極めてうちも、生き延びてきたんや。一途に朝倉にばかりついてたら殺されてしまう。滅んだところについていたら義輪家はなくなってしまう。その選択肢、自分で生きていくための選択をしたわけよ。だから、今があるということなんや。私も全国を回ってましたが、実は新潟の村上市と山形県に近いとこや、その一番大きい茶屋があるんですけど、お茶は新潟が北限の茶どころちゃうて、新潟より北は茶畑はないんや。村上でお茶をかうて、なんか住所書いてくれと言われて書いてたら「あなた福井県の人ですか」「そうです、ウル

シの商売にここ村上へ来てるんです」「私も福井県の者です」「いつこっちに変ったんですか」「朝倉義景が滅んだ時に、朝倉の家臣だったから、新潟まで逃げてきたんや、それから五百年も住んでいる」。

新潟行くとね、その入口に越前浜ってあるんや。新潟県の海岸なのに越前の名がついている。昔はもう新潟県ちゃうともう過疎でね。誰も行かなかったから、そこまで信長も攻めてこないと思ってね。みんな逃げて行ったよ、命からがらね。私も朝倉についていたら逃げていくか、殺されるかだった。だから、義輪家は助かったということや。そういうような、劇的なことがね、沢山あった。何百年っていうとね、世直り国替えじゃないけど国が危ないとかがね、沢山あったんや。朝倉が滅んだと思うと、今度は秀吉の時代になって、私ら

のどこは、府中と行って前田利家になりますね。

一向宗で、仏教を信じるから、なんまんだぶつをやつていて、武士なんか、いらんちゅうわけや。

言うこと聞かんのや。朝倉もそうやけどね。その辺の私の近くの農民は言うこと聞かんもんやから、利家が反对者を皆殺しにしたんや。農民はもう死んでも死んでも、なんまんだぶつを言えば、極楽へ行けるつてね、そして農業も、生活苦しいんやで、地獄みたいな生活してるわけだから、もう、こんな苦しい生活、どうでもいいというふうな思いやからね。うん。だから利家は鉄砲や刀で攻めて来て、農民は鍬や鎌で応戦や。殺されても殺されてもや。どんだけ殺されたか分からん。この現実を忘れず、後世に残すように、屋根瓦に焼き付けて何枚も地面に埋めたんや。それが何枚も地面の中から出てきた

そういう中でも、蓑輪家は生き延びたつちゅうことや。そこでも何とかね、生き延びたんやぞつて、そういう話をするんや、いろり端でね、じいちゃんかね。面白くおかしく、歴史の話やら何やらね。それを教訓になるような話をするんや。

泥棒の話

蓑輪 私の実家近くに、大きい家の旦那衆がいたけどね、ウルシで儲けた旦那衆だけど、ある晩、そこのご隠居さんが、夜九時半頃、家にいたら物売りが来たらしいわ。金を持っているとこやから来るんだね。その話を親がするわけやね。でもこの物売りが、上坂というちやけど、そこのご隠居さんが奥で見ていると、女関で何か小間物か何か広げてたらしいが、その男が、どうも家の中を見たりしてるんや。ご隠居さんはやつぱり人を見る目があつて、ちよつとあの男をおかしいと思

った。「これは普通の男でねえな、これは泥棒やな」と思ったんや。

それで、使用人に「俺はこれから、玄関の入ったとこの十間で寝る」と言った。「それで、おそろくあの男は帰って来るはずやで。俺が言うからその時は、床の間の刀を持ってきて、布の袋で出来たこの巾着に金を入れてとくで、それを持ってきてくれ」昔はガラガラと戸が開くが、十間は漆喰やでね。うん、ここ掘ると手が入って、カギ外すと戸が開くんや昔は、江戸時代は。それで夜中、草木も眠る丑三つ時の頃になって、ゴソゴソ音がしたんやと。何か掘っている音がするんや……。

そのうちに、こう、手出して来て、カギを開けようとしたんやて。いよいよ来たなと思って、そのご隠居さんは両方の手でつかんで使用人に、おい、床の間の刀持ってこいっていうねん。泥棒の

方は手を切られると思ったんやね。大慌てや。したら、もうこの巾着の金をどんだけあったか知らんよ、それを手渡して、もう今度は悪いことをしなや、これで終わりにせいやって話して返したという話をするんや。普通は捕まえるかと思っ聞いていたが、びっくりしたよう。刀持ってきて、これつきりで終わりにせいよと、金を渡して、もうこんな悪いことせんとけって言って返したという。これ、本当の話だよ。蓑輪家の裏側の旦那衆や。やつぱり、ウルシで儲けた人やね。

そういう面白い話を、色々するんやね。お父さんには、おじいさんが、私にはお父さんが。面白い話って覚えてるじゃん。これが口伝えなんや。もう人生においても、村においても、あんまり、えばつたらあかんぞって、そういうことも言っている。まあ、持つもの持たないと馬鹿にするで、

貧乏な人は馬鹿にされる。ある程度持つていないとな。昔は土地があるものが、えぼった。村でお金が入用になったら、みんな平等に割り振った。「戸数割」というてな、財産に応じて金を出したわけや。そこで、沢山払う人は、えぼるんやね。それを何百年も見えてきていると、どういふ生き方したらどうなるって、分かるんや。

何百年もいると、うちだつていいときもあるし、貧乏になつて福井を出て関東に行かんといかん、というときもあるし、色々あるんや、紆余曲折があるとその中で、人生訓ちゅうかね。うん、やっぱり人間こういう思い方がじゃないといかんあつて分かつてくる。だから、力つけてきて一番上になつても、えぼらんと一番下に座つていゝんや。それで、村のために一生懸命尽くせばいいんじや。この道でもそうでしょ。自慢したらあかんとか、

えぼつたらあかんとかね。偉い人なるんでないんですよつて言われるけど、そういうのわきまえてるんや。何百年と長い間ずっと見ていて、そんなだつて。だからね、いま本読んでわかつたんでねえ、人生を歩んでいれば、わかるよ、何百年前にね、あの人はどうなつた、こうなつたつて。ずっとね、実際、世の中見てるとね、分かつてくるよね。だから、考えたんではない、人の通り越しを長い間、見ているとこういう人があつたい人になるのが大事じゃなとかね、えぼつたらあかんとかかね。分かるんや。そういうことをね、色んなことをね、いろいろを囲んで口伝えて教わつてね。

商売は牛のよだれやとかね。生き物を殺す商売はあかん。一寸の虫にも五分の魂つて言うけど、生き物を殺したら絶対あかんつて。普通の農家でも、うん鶏を飼うとか、豚を飼うとか。で殺した

りするわの。でも、そういうもので生業を立てるのはあかんという。だから、長い目で見るとね、大抵、損してやめている。一時はいいかもしらんけど。うちも間違えたかも知らんけど、福井県は、一時は織物の産地で絹織物は日本一やったわけや。

カイコの話

養輪 カイコさんを飼うんですよね。カイコを飼って葉っぱをあげて大きくして、これを釜に茹でて殺すじゃない。殺して糸取るんや、何万か何十万匹とかね、殺生していることやね。一期は儲かったんや。でも、何かの拍子にみんなつぶれてもうた。だから、そういうこともあって、これ生き物を殺してるんで、自分の金を儲けるために何万何十万もの生き物をね、殺しているんや。だからそういう商売はあかんぞつて。儲かるでもちろん、だが、失敗したら分かる。

生き物を、ふやす商売ならいいけど、殺す商売は絶対あかん。命あんな、生活の知恵やで。自分も失敗した、他の人も失敗したの見聞きしてきたんやね。色んなことが、長い間、何百年の間には、そういうことを毎日毎日やで、いろいろでもう寝るのも忘れて説教なら嫌だな、聞きたくないとなるけど、それを面白おかしくね、勉強ならもう面白くないけどね、そういう説教でないんだ。色々こういうことあったと、ああいうことあったと、興味も沸いて来る。また火を見るのが楽しみなんや。ストーブの火がね。薪をたいたり、火が燃えるのを見ると何となくね、気持ちいいもんや。毎日毎日そうやって仕込まれたつちゆうことやの、代々ね。

だから、私は二十歳から道につながつて、日本中営業してますけども。道でもそうやけど「養輪

さんは若年寄やな」と言われたもの。物をよく知
っているから、若い者同士より物知った年寄りと
接触して、色んなこと聞いてるからね。そう言わ
れた。道でも世間でも皆さん、若いもんとちよつ
と違ふなつて。

だから、普通は失敗して分かるんやけど、もう
経験する前から分かる。こうするとこうなるな、
なんてことが、そういう意味で親は仕込むんや。
失敗して分かつたんでは遅いんや。何でも失敗し
たら自分で駄目だと思ふけど、これは失敗する前
からこの仕事をするとうなるな、ああなるなつ
て分かつているもんと分かつらんもんでは、全然違
うんですよね。

年寄りはよう知つてるんや、親もじいちゃんも、
結局、何十年も三十の人と五十の人と八十の人と
それだけ生きてるつちゆうことは、自分も経験し

たし、色んな人を見たり聞いたりすると、知恵が
つく。特に代々ずつとね、つながつていると、こ
れまたね、違ふものがある。

だから、おやかたさま、食べていければいいん
ですよ、とおっしゃるけど、とどのつまり食べて
いければいい。うちは食べていけんときもあつた
んでね。農家はね、食べていけん時もあつた。米
の不作のときは食べていかれんで、首つって自殺
した人も結構あるんや。食べていければそれでい
いんです、とおっしゃるけど、その通りなんや。
最低限、食べていければそれでいいんだという、
そういう思いになつていければ、警沢せなという思
いを持たなければ、食べていける。だから、おや
かたさまは常々おっしゃつていたけど、食べてい
ければいい、その通りなんや。

福井の水飲み百姓は、もう食べていくのがやつ

との時代があったけど、最近まで、農民は生きてきたんや。不思議とずっと続いているんや。農民は儲からない、わずかしか作らないし、武士が出てきたら年貢も納めなあかんけど続いてきた。続かんのは、儲かる商売している人や。今でも眼鏡屋でも、ハタヤでもカメラでもあるけど、商売しているのは続かんのや。百姓は儲からん儲からんと言いながらずと何百年も、面白いもんなや。あかんあかんちゅうて言いながら、農業してると食べるだけあるんでね、米作っている、野菜作っている、山行くと山菜がある。だから、最低限度の食べるだけはあるつちゅうこと。

それが分かるのは人間でなくても、うちの近くには、サルもようけおるし、イノシシもようけおる、熊もおる。鹿もおる、皆食べていけるんや。人間かてほほ食べているんや。レベルを落とせば、

自力で食べていけるんや。カラスでも食べていくんや。人間かてそういう気持ちになれば、食べていけるんや。

父の父

養輪　うちの父親は、生まれは明治二十八年なんです。男四人兄弟の次男坊。戸籍上はおそらく、十人位あったんだらうけど、昔は死んだんや。女の子もおったけど、最終的には四人やったつちゅうことやね。父は四人の次男で親に認められて、家族も一番いいだらうってことで、だから、代々どうでも長男が継ぐということではないんだよね。やっぱり優秀な者が継ぐという、天皇家でもそうやの。ずっと代々見ると、どうでも長男が継ぐかというところでもない、次男が継ぐ場合もある、そんなもんや。

父は昭和五十五年に亡くなりまして、七十四歳

でしたね。本当に人生ちゅうのはどうなるのか、それぞれ分からんけども、私もここにいるというのはね、生まれるべくして生まれてきた、偶然ではないなと思うんや。父親は子供がなかったから、私も生まれて来なかったはずなんやけど、父の兄弟の一番下の四男を養子にした。養子にして嫁もらってあと継がしたわけや。そうしたところが、嫁さんが居付かなくて離別した。父はまた後妻もらったんや。

母のこと

義輪 この後妻が、私の母親での、私を生んだんや。私は昭和二十四年の一月に生まれたんですけども、だから、後妻をもらわなければ、私はこの義輪家に来なかつたつちゆうことや。

だから偶然というか、生まれるべくして生まれただけや。前の嫁さんはどんな嫁さんやったか、

父親が最初結婚した人とはにかく、べっぴんさんやったらしい。子供るとき、どこ行つても、器量よしのべっぴんさんやつたと聞いていた。そやけど仕事せんよ。うちの父親仕事に出るけど、嫁さんは仕事せんや。綺麗な人は女の仕事せんや。だらしい。

それで、子供もなかつたし、子無き三年は、というから三年待たされといふかね、仕事もせんし子供はないし、出されたよ。だからこの義輪家の嫁としては間に合わんと出されて、器量もいいし、何かそのあと、校長先生の嫁に行つたらしいけどね。手切れ金は大分やたらしい。

なるほど、父親が後妻もらつたから、私があるんでね、そうでなければ私今ないんや。私はこの道に来て初めてわかつたけども、生まれる前からそういうね、約束事やつたんやろなと思う。「生ま

れる前に天からの約束事が、あるんですよ」とおっしゃるね。

「今度生まれてきたらみたままさんがね、できたらおやかたさまの手助けをするんだ」と、「手となり足となって働かせてもらおうという、みたままさんの約束事で、生まれて来たんですよ」と聞いたことありますけど、そういうもんだろうなどと、物事に偶然はないと思いました。

物事に偶然はないっていえば、うちの母親もうね、一遍、嫁に行つて実家に戻つて、それからうちに来たんですけど、うちの母親自身も九死に一生を得てるんや。小学校のときに何か大水が出てね。付近一帯水びたしで、それを見ていたら川に吸い込まれてもうたらしい。普通ならもう助からないところ、なんか手を伸ばしたら、川に杭があった。それにつかまつて助かった。そのとき流さ

れていたら、もう私も生まれてこなかったでしょうね。

だからみんな訳があるんや。母親が助かつて、嫁に来て、私が生まれるという、そういう約束事が、あつたんやなど、私はそういうふうに思うんやね。もう偶然というものはないということをおっしゃるから。

大事に育てられる

蓑輪 私生まれたときは、母親二十九歳でしたけどね。その後、二男二女が私の後、生まれてね、五人兄弟になつたんや。で、あとの四人はどうしたかつちゅうと、みんな近所へ預けたんや、そして家中で、私だけ守したんや。本当に大事大事っていうてね。最初にできた男やから私だけを大事にしてんだということ、今でも兄弟はなんで兄弟を平等に扱わないんだって言うてるけど、私が

扱ったわけではなく、そこは父親がそうした事であつてね。なんで差を付けるんや、兄貴だけ大事にして、ということがね。今でも、私の弟はもう六十代に二人なつてますけど、二人ともそう言うてますね。そんな非常にね、私ほど大事にされた者もない。

小学校に上がるまでね、箸を持ったことない。今でも覚えてるのは、おばあちゃんがいつもね、食べさせてくれた。福井は焼きさばつてね、一本丸焼きにしたのを串に刺したのを魚屋が持つてきて、醤油漬けて食べるんや。小魚が多いんや、幼稚園前やつたけど、食べたらね、骨があつたんよ。で、「おばあちゃん、骨があるよ」つて言つたら、「悪かつたな、今度はちゃんと骨ないように気をつけて、口入れてあげる」つて言つた覚えがある。

小学校上がるまで、鉛筆も持つたことがなかつ

た。自分の名前、蓑輪一美も書けなかつた。じいちゃんがひらがなだけでも書けるようにと教えたけど、書かなんたらしいわ。ミミズの這つたような字書いて、爺ちゃんもサジ投げてしもうたんや。

母親のチチは覚えていないけど、ばあちゃんのチチを飲もうとしていた。八十過ぎていたから出るわけじゃないけどね、子供は好きなんやね、チチが。そんなんで、もう大事にされて、欲しいものは何でも買ってもらえた。あんまり大事にされるから、体が弱い子になつてね、病気で医者通いばかりしていた。二十歳までそんな感じでしたね。野球はやつていたけど。

勉強したら馬鹿になる

蓑輪 父親のことをもう一つ言うと、小学校入つても、父親は勉強しろとは一切言わなかつたね。だから、逆に勉強するなど、勉強すると馬鹿にな

る。分かんない勉強なんかする暇があったら、家の仕事なり、百姓をしろって、よう言うと思った。いつもそういう口癖だった。

母親はね、それをいつも聞いていて、「お父さん何言うんですか。子供は学校行って勉強せなあかんのに、勉強したら馬鹿になるなんて」って言うていた。父親は、勉強と知恵は、世の中出でから身につけるものや。学校の勉強はよう間に合わん、ということ言うたんで、私もそんなに勉強しなかつた。私の兄弟五人ともそうや。いまもみな家の仕事やっている。勉強なんかせんという前提っていうこと、父親はいつも言ってたね。だから、勉強できなかつたと思う。

みんな学校終わつたら、兄弟五人ともは勤めもせん、家の仕事している。代々、蓑輪家で生まれたものは、よその仕事せんかて、蓑輪家のこと

をすればいい。私の父親も兄弟が四人いるけども、皆、蓑輪家のために、親の代も私の代もしている。

仕事場にて

蓑輪 私は五人兄弟で、五人ともうちの商売している。私のところは私の家内もそうやしね。息子も家で商売しているし、私の次男の嫁さんも勤めたし、次男の子供も今勤めてるし次男の嫁も勤めているし、三男のところも姑さんも嫁も今、勤めている。三男の長男も勤めている。

それで皆が、一族郎党、うちに来てるといふことや。うちの子どもたちは、六人兄弟だけど、六人のうち、長女、子どもも、長女も嫁に行つたけど、うちに勤めてるよね。

そんなんで、やっぱり父親がどういふ思いをしているかだね、そういうことなつて来るんだらうなど思う。誰一人大学行ってないもん、私の兄弟

は。私の子供の代なら皆行っているけどね。私はもう勉強も好きでもなかったし、父親が遅いときの子やからね、四十五才のときの子や。大学四年間、遊びに行くわけにいかんから、早く家業を継がなああかんと、そんなことですよね。

そういうような、皆さんも、家の仕事をみんなでやる仕事では、それはもう、だから力になるけど難しい面もあるわな。気がおうたときは、うまくいくけど、うまくいかんときは、喧嘩しようとする。ちよつとこれは仲良くするのが難しい。おやかたさまも、そう仲良くするんですつておっしゃるけど、仲良くするのは特に身内はね、何でも言えるじゃない。だから余計ね。兄弟でもね、難しい。

福井と東京にいるなら、仲良くできるんや、遠いからね。たまに会うんらしいけど、近いとね、

逢うと人の欠点も見えるしね、富士山も遠くで見るときれいだけど、近くになるとペットボトルやらゴミの山に見えてしまう。福井でも、日本人で社長が多いのは福井県らしいけども、眼鏡屋でもハタヤでも、初め仲いいけれども、大抵、喧嘩して別れている。だからこの間亡くなった田治さんも眼鏡屋やつとたんや。なるほど眼鏡の業界知っていて、私どもを見て、蓑輪さんとこ、よう喧嘩せんとやってるのうって、こういうわけや。眼鏡屋で兄弟でなくしてないとこ一軒もない。皆、喧嘩して分かれているって言うんだ。じゃあ何かい、田治さん、私のとこ別れるの待っているのかつて、冗談言ったけど、そのぐらい大変なんや。わかるように、喧嘩して別れると、今度は敵同士になるでね。同業者だからお互いにね、憎しみを持って、お互いが駄目になるんや。難しいん

だ。大変仲良しするときにはね、すごくいいんだけど、天国と地獄ほども違いますね。

仲良くさせるのが自分の仕事

義輪　だから兄弟で仕事するとしたら、仲良くするちゆうことが一番や。これは天国と地獄ほども違いますね。兄弟がいたら、大事なのは仲良くできるかどうかや。できなんだら、お互いに沈んでしまふ。だから、この道の教えもサラツとね、仲良くするんですよとか、喜ぶんですよって言うけど、非常に重く受け止めているんです。(笑)

　　こういう風に色々見ると、ちゃんと仲良くするしかないもんでね。仲良くすると力が出るしね、喧嘩すると反対の力が強くでる。互いに足引っ張ることになる、だから、兄弟は五人いましたけど、とにかく、私は仲良くするということが一番、私の仕事やなと思った。金儲けるとか、物を売ると

いうこと以上に、仲良くすることが大事や。だからその見本を、父親が示したんよ。

(春号につづく)

天人女史の教えから学ぶレジリエンス

— 国家的危機を乗り越えるために —

レジリエンス



埼玉 市野道明

近年、注目を集めている概念のひとつに「レジリエンス (Resilience)」がある。言葉の意味は「外部から力を加えられた物質が元に戻る力」を意味し、そこから転じて、幅広い分野で用いられている。

生態学の分野では、回復不可能な状態を回避する生態系の力をレジリエンスといい、ビジネスの世界では、アクシデントに遭遇しても業務を継続できるように、データや資源のバックアップを整備することをレジリエンスという。

災害に対しては、そこからしなやかに復興できる力をレジリエンスという。つまり、生きることすら困難な惨事に遭遇しても、不撓不屈な精神力で生き抜く力をレジリエンスという。

レジリエンスの研究に注目が集まっている背景には、大規模な自然災害や虐待などによる「心的外傷」を被る事案が増加し、「生き延びることが困難な大きな災禍から、人はいかにして立ち直れるか」を研究することが、国家的課題となっているからである。

心的外傷とは、身の危険を感じるような出来事戦争、自然災害、虐待などにより、極度のストレスを経験した後、日常生活に支障をきたす強く不快な反応をいう。日本でも、阪神淡路大震災や東日本大震災の経験を踏まえ、今後の国家的危機に備え、レジリエンスの概念が急速に広まっている。何ごとにもめげないで生き抜く力、それがレジリエンスである。

レジリエンスの正体

生きる力の根源は何か。ある有名な解剖学者は《人のすべての内臓は宇宙に繋がり、人は宇宙によって生かされている》と喝破した。宇宙とは「大自然」のことである。しかし、それを医学や解剖学で証明することはできない。それは、「こころ」を形として認識できないのと同じ理由である。

人は「宇宙と繋がる生命の根源」を自分の身の内に覚知することができたら、生きる力の根源が分かる。それが求めるレジリエンスの正体である。

その正体は身の内に存在する「みたま」である。「みたま」は生まれる時に、親から植え付けられた「人間の根」にあたり、親から親へと、天なる創造主神にまで繋がる絶対的存在である。「みたま」は人が宇宙と交信する「受発信機能」の役割を担っている。

来たる日本の危機を乗り越えるためには、日本人の多くが、生きる力の根源である「みたま」を覚知し、「みたま」が能らく人にならなければならない。昔の偉人は「みたま」

が開花し、「みたま」が能らっていた。

有史以来、幾多の国難に見舞われてきた日本であったが、その都度、「みたま」が能らく偉人のもとに、日本人の心がひとつになり、国家的危機を乗り越えてきたから、今日の本がある。

みたまの開花

人は正しい理を踏み行えば、みたまは開花して「みたま通り」になり、宇宙の根源に繋がる。それを「みたまが能らく」という。みたまが能らくと、人は生命力が盛んになり、みたまが自分を守るように能らいてくれる。危ないところに行かないようにみたまがする。滑り落ちても痛くはない。そういうように、みたまが抱く。それだけではない。最適な人生を歩めるように自分を導いてくれる。みたまとは誠に神秘的な存在である。

この神秘を「ひな形」として示されたお方がいる。あたらしい道の教え主「松本草垣女

史」であり、そのお方を道の者は「天人女史」とよぶ。天が行き詰った世を救うために、天人として、地上に出現させた史上唯一のお方である。

正しい理を踏み行うとは、「天の理」に沿った生き方をする事である。天に天道あるごとく、人には天が定めた歩むべき道がある。天の理にもとづき生きることにより、「みたま」は開花して、宇宙の根源に繋がる。

みたまの神秘「全智全能」

天人女史は「全智全能」の神秘を次のように教えている。

《神の全智は人間に、いまはおよそ与え尽くした。これからは 神は全能を人間に授ける。全能とは人間の「根の能らき」をいう。根の能らきは物凄い。その根が人間のお腹の奥にある。元根の太い根っこが臍の座にある。人間はもうこれからは、四方八方の神を拝まなくていい。夜寝る前に自分のみたまを拝む。そうすると、みたまがいつか能らきます。

それで天の根っこに繋がる。根っこに繋がれば大したもんじゃ。神の能らきが自分の腹から湧いて出る。それを神人合一という。もともと神は親。人間は神の子じゃ。これが神ながら、日本の道である」(昭和35年5月15日)

人間はすでに高度な科学文明を築き、絢爛豪華で豊かな物質文明を完成させた。もはや、これ以上の科学技術の発展は、人類の思いが建て替わらない限り、世界を滅亡に追いやるものである。「神の全智は人間に、いまはおよそ与え尽くした」とは、このようなことを言っているのである。

しかし、天はいまだに、人間に全能の能らきを授けていない。みたまの能らきを知れば、真実の自分が分かり、自分は何のために生まれてきたかが分かる。

全能とは目に見える物質文明に色取られた形而下の世界ではなく、目に見えない、形姿のない高次元の世界にある。人類の神秘とされる生老病死、因縁と業、人間は一体何のために生まれてきたかを知る力を全能という。これが分かれば、人の生きる苦しみ、病氣な

どの苦悩は雲散霧消する。

言い換えると、全能とは人間に具わるみたまが能らくことである。みたまが能らくするためには、自分のみたまを拝めと教えられた。拝めとは自分を掘る、自問自答することである。

自分を掘るとは、自分とは一体いかなるものか、自分はいかなる因縁や業をもって生まれてきたのか、自分はどれだけの因縁を果たせたのか、その足らざるところを天に詫び、自分の建て替へに努力することである。それができればみたまが磨かれて上昇し、全能の神秘の能らきが覚知できる。

「元根の太い根っこが臍の座にある」とは、人間のお腹の内裏に人間の根であるみたまが存在し、みたまが宇宙の創造主神に直結している自覚を教えている。

日本の危機

(1) 国難をもたらす巨大災害

一つには避けることのできない巨大地震である。20年から30年以内に確実に発生するとされる首都直下地震と南海トラフ地震、加えて、東京、大阪、名古屋の主要都市で大水害の発生が懸念される。

被害の最大予想は、南海トラフ地震で死者32万3千人、避難者950万人、首都直下地震で死者2万3千人、避難者720万人、首都水没で死者15万9千人とされており、これらの災害を合せた死者は最大で約50万人規模に達する。現代において、首都直下地震と首都圏水没が複合災害として起きれば、首都圏は壊滅し、そのうえ南海トラフ地震が連動すれば、わが国は滅亡するほどの国家的災禍を被ることになる。江戸時代にはそのような災害に度々見舞われている。

二つには地球温暖化に伴う海面上昇と異常気象により、洪水や高波の危険が増大している。令和元年10月の台風19号は100年に一度といわれる猛烈な雨により、千曲川と阿武隈川の河川を決壊させ、死者・行方不明者を合わせて108名の大惨事となった。幸い

に東京湾が満潮時でなかったことから、荒川、江戸川、利根川の決壊は免れた。決壊していたら首都圏は大惨事になっていた。

今後、この数倍規模の台風と線状降水帯が日本列島を直撃することは、氣象学的にも明らかになっている。東京に限らず、大阪の淀川や名古屋の木曾川、長良川の決壊も懸念される。それだけではない。台風19号以上の暴風雨となると、東京湾、伊勢湾、大阪湾の海面は大きく上昇し、巨大な高潮が発生する。高潮は津波となり、港の沿岸地帯を襲い多大な被害を出すことになる。

三つには火山の噴火である。東日本大震災の直後に富士山直下でM6.4の地震が起き、富士山が噴火しないかと専門家の間で緊張が走った。富士山は800年の延暦噴火、864年の貞観噴火、937年の承平噴火、1707年の宝永噴火と噴火が起きており、小規模な噴火を含めると、平均100年の間隔で噴火している。しかし、宝永噴火以来、315年間に一度も噴火していない。地下にある大量のマグマはいつ噴火してもおかしくない状

態にあり、南海トラフ地震と連動する可能性が指摘されている。

(2) 中国の脅威

世界覇権をかけて米中の駆け引きが激しさを増している。戦闘の火ぶたは台湾有事にはじまり、尖閣有事に飛び火して、インド太平洋を跨ぐ世界戦争に発展する危険がある。これらの有事は尖閣諸島、石垣島、与那国島、宮古島を含む日本の領海が戦場となる。望むと望まざるにかかわらず、日本は日米安保体制のもとで、中国と存亡をかけた戦いを強いられる。

けつして戦争は起こしてはならない。起きたら日本はつぶれる。日本の平和と安寧を守るため、日本の国を守るべく、挙国一致の精神に目覚め、国の安全を守り抜かなければならない。

(3) パンデミック

人類はこれまでに、結核、マラリア、天然痘、ペスト、インフルエンザ、エイズ、サー

ズなど多くのパンデミックを克服してきたが、今後はどんな抗生物質も効かない致死率30%から60%といわれるスーパー耐性菌の存在が脅威になる。すでに新型コロナウイルスに感染し、集中治療室で治療を受けた患者とその家族の多くに、心的外傷後ストレス障害の症状が確認されたとする研究結果が報告されている。

天人女史に学ぶレジリエンス

天が人をして偉業をなさしめようとするとき、そのすべてを剥奪し、千尋の谷に落とすという。人はどん底の苦難のなかにあっても、天を恨まず、忍従の誠を尽くし、生き抜く決意をしたときに、神秘が出現する。その見本が天人松木草垣女史である。

女史は生来、蒲柳の身なれど、清らかで優しく、温かい心の持ち主であったが、混濁に満ちた世の中で、生きることさえ困難な人生を送っている。しかし、女史はどんな困難に

も、苦を苦としないで逃避することなく、これを因縁と悟り、成ってきた一切合切を喜びに切り替え、生き抜いてきた。

女史の通られた足跡と、生き地獄の人生を通り切った人品風格は、凜とした中に麗しい気品を醸し出す松竹梅になぞらえることができる。松は縦横に根を張り、ときには岩をも貫く神が宿る神聖なものとされ、竹は厳しい節ごとに芽生えて丈を伸ばし、旺盛な生命力を現す。梅は暗香浮動、風雪に耐え、闇夜にほのかな麗しい香りを漂わせる。人としての持味は、一生食べても食べ飽きない、お米の味にもたとえることができる。

女史のみたまから「国が危ない、国が危ない」と天音が流れ、神秘が現れた。女史が52才の時である。その後も、女史のみたまから天の理が泉のように湧き出て、人間完成を遂げられた。人間完成とは、みたまが磨かれ、因縁や業を納消し、みたまが能らく「みたま通り」になった人のことで、天啓者とか神憑りとは異なるものである。

女史は「人間本来かくあるべし」とする天の意図通りの「ひな形」として、「いかに生

きるべきか」を示す理想像として、生涯己をなくして身を挺し、世のため、国のため、人のために一生を捧げ切ったお方である。

女史はいまのような時代になった原因を、《人類が天の理に反する醜い欲望―権力欲、名誉欲、財欲、物欲などの根の深い宿業―に振り回された必然の結果である》と教え、やがて、「行くに行けない、越すに越せない」時代が来ることを警告し、いかにしたら私たちが救われるかを、次のように御垂示されている。

◇天と地がもめる

《天と地がいずれいずれ、もめますわな。天と地がいずれもめる。そういう頃がある。だからみんなこの道のお方は、常日頃、自分に厳しく、それでいいんです。ところが浮世のお方は何にも知らない。だから、後手後手ごてつく。そうすると、死ぬよりほかに方法がない。だから、精神的に修養の必要がある。それを教えるんえ。日本という国は、いまに天地がもめて、何かの形で、住まっているわれわれに、苦をみせるんです。ですから浮世

に対して、思い方を知らしてやる。この時代、この国に生まれた自分たち。過去を振り返る。そして精神修養。これを教えてや。国だ、国だ、国が危ない。それに気がつくはずだ」

(昭和48年1月11日)

◇救いの理(1)

「おかげさんは自分の身の内です。それを知って欲しい。他から、おかげさんは、これほどんでもないんえ。危ないんです。自分の身の内に、自分が好かれる。それがそれが、得もいえんのえ。こういう風に申します。肉体は天上から、われわれはもらっている。その中にみたまさんがいる。あらまあ、ころころ、ころころ、ころげているんえ。それを救いの理という。さあ分かるうえ。一人残らず、救われている。建て替えますよ、建て替えますよ、自分自身を。どうやあ、みたまさんよ、みたまさんよ、みたまそのものに、なりたい。これが理です」(昭和49年3月2日)

◇救いの理（2）

《そうしたらね、この道だけが喜べて、浮世の人は喜びがなくなつて、どうにもならないから、だんだん、だんだん、死にたい、死にたい、死にたい人が、増えるんですよ。そうすると、お互いさん同士、日本人は、そうだそうだ、同胞なんだ。そこで、そこで、日頃々々に、お前さんたちが、これからです。どうしても、この道を分かつてもらつて、要するに、みたまさんになる。そういう人を戴きに戴く。そうでないと、日本人は、もうこれからが、苦の苦です。お前さんたち、沢山の人が死んだら、とんでもない。やっぱり、お互いさんが、生きて生きて、生きおすのが、本当です》（昭和57年5月7日）

おわりに

われわれは人類が滅亡するほどの危機の中にいる。地球環境はかつてないほどの異常状態に陥り、日本が滅亡するほどの巨大災害が予想される。

いつ訪れるともされない天災は戦争とは違い、天意として実行される大自然からの警告である。科学技術がいくら進歩しようが、人類は大自然を超えることはできない。

大国間の軍拡は人類を終焉させるほどに拡大した。更なる軍拡により世界の覇権を握ろうとする野望は人類を滅亡に追い込むだけである。ロシアによるウクライナの侵略戦争は世界戦争に発展する可能性をもつ驚愕的出来事といえる。

松本草垣女史は、70年前に今日あることを教え、「行くに行けない、越すに越せない時代が来る」と教え、天の理に沿う生き方こそが、人を救い、国を救い、人類を救う最後の教えであると説いた。日本人が生きる力の根源である「みたま」を覚知することにより、人が生きる究極のレジリエンスに目覚めてくれることを願わずにはおられない。

編集後記

「元の日本とは」

○以前、本誌が月刊誌だった頃、特集を組んだことがある。「国が危ない」から「元の日本に還る」という、道のメインテーマだった。ところが、やってみると、肝腎の「元の日本」が何か分かってない自分に気づかされた。

○一般の読者から、元の日本ってどんな日本ですか？ と聞かれて、昔のよい国です、と繰り返すだけで、どんな日本を指すのか？ 具体的に答えられなかった。

○戦前の日本？ 明治の頃？ それとも江戸以前？ あるいは古い古事記の頃？ 縄文時代？ どうもはつきりしない。結局、それらすべ

てがそうなのだろうが、明確にこれだと言えるものが見つからない。

○国が危ないのは、現代人が「頭、中心」で考えるようになったからであり、それをやめて、昔の「みたま、中心」の生き方に還ることが言われている。神代の頃の日本は皆、みたま人間だった。その頃に還ろう、と言われているのだと思う。

○段々、分かってきたのは、日本の文化には「神道」の考えが多く影響を与えていると聞いてからのことである。私たちの日常の行動や思考は気づかないうちに、神道の影響を深く受けている。

○自然と神と一緒に暮らしていたあの神道、中でも、古神道が元の日本をよく捉えている。そういう目で見直してみると、古神道は日本人ら

しさを形作った日本人の根幹の考え方を持つていることに気づかされる。

○最も古い理の道であるこのあたらしい道を引継いでいるのが、この古神道ではないだろうか。つまり、元の日本とは、古神道の日本のことではないだろうか。

外国人の眼に映ったあたらしい道
○「あたらしい道の場」に外国の学者が何人が訪れている。その学者たちはいずれも、あたらしい道を神道または日本の古い文化として見ている。

○フランスのエルベール教授は、「私は日本の青年に告げたい。欧米より遙かにすぐれた宝をもらって、欧米の模倣に浮身をやつしている

愚かさをやめよ。その宝とは神道である。神道なくして日本なし」と言っている。

○草垣女史を数千年に一人の世紀の聖者と讃嘆した、米国の哲学博士
ジナ・サーミナラ女史は、

「神道はインスピレーションの、永遠の古い源泉の一つであり、”あたらしい道”は、優れた新しい源泉のひとつです」と、語る。

○草垣女史のご垂示には、この道は、「日本の本当は古神道」と言われている箇所がある。

季刊誌「あたらしい道」の購読は

お申込みは、各支部毎にまとめて、左記にご連絡下さい。

(年4回、6月、9月、12月、3月の各月8日に発行。各発行月の前月15日までにお問い合わせ致します)

申込先..

あたらしい道 本部

電話番号 0729 (56) 7971

FAX 0729 (57) 5100

季刊誌「あたらしい道」 令和5年冬号

令和5年12月8日発行 (第537号)

発行人 中井 健

編集人 柳田 泰

発行所 一般財団法人 あたらしい道
大阪府羽曳野市はびきの3-3-18
〒583-0872 ☎0729(56)7971

印刷所 オリムピア印刷株式会社
大阪市西区江戸堀 2-1-13 6F
〒550-0002 ☎06-6448-8508